

# 裏路地探険

玄武岩の重厚な石垣が伝える「宵田のいと」  
但馬各地から人や物が集った商人の町  
元気を発信するカバンストリートを歩く

## 宵田商店街を歩く／豊岡市中央町

その昔、「三たん(但馬・丹後・丹波)一の商店街」と呼ばれた豊岡市の宵田商店街。通りを歩けば、人の肩にぶつかるといふほど賑わいを見せたという。4代、5代と続く老舗の商店や家屋が軒を連ねる。

宵田の商店街が発展したのは、羽柴(豊臣)秀吉の但馬平定後、神武山に豊岡城が築かれ、城下町が形成されたことに始まる。江戸時代には、山のふもとに陣屋が置かれ、藩邸のあった現在の豊岡市立図書館(京町)を取り囲むようにして、武家屋敷が建てられていた。そこから北へ進み、戸牧川にかかる宵田橋を渡ると、商家が立ち並ぶ。京町が豊岡の政治の中心であれば、宵田は経済の中心であった。



カバンストリートのメインショップ「カバンステーション」。365日、全て配色パターンが違う「パーストート」や、コウトリをデザインしたカバンなど、オリジナルバッグが並び、手作り体験もできる。



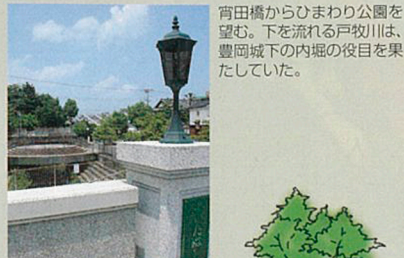
豊岡商協会長を務めるカバン職人、植村美千男さんの工房にて。豊岡のカバン業界の生き字引といえる存在。



但馬でも歴史の古い商店街だけあって、レトロなお店が軒を連ねる。アーケードの上を見て歩くのも、おすすめ。



国道沿いに設置されている、全国的にも珍しい「カバンの自動販売機」。ホテルに入ったらトートバックを販売している。信号待ちをしている車の人も思わずびっくり!!



宵田橋からひまわり公園を望む。下を流れる戸牧川は、豊岡城下の内堀の役目を果たしていた。



宵田橋にある「見初めの松」。周辺には、大石内蔵助の妻・りくの実家である石東家があったとされ、内蔵助がりくを見初めた場所という伝承が残る。反対側には、りくがふり返ったという「見返りの松」がかつてあった。

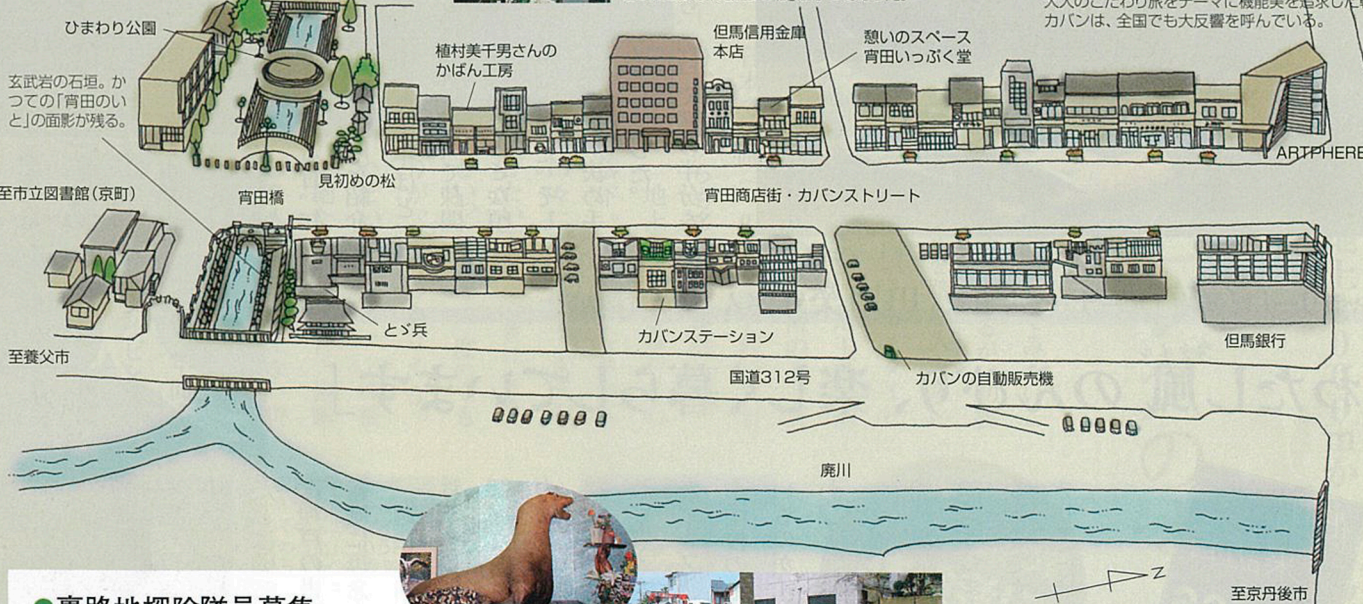


アーケードには、カバンストリートの文字



カバン専門店「ARTPHERE(アートフィア)」。オーナー兼デザイナーの由利佳一郎さんは、なんと6代目。大人のこだわり旅をテーマに機能美を追求した斬新なカバンは、全国でも大反響を呼んでいる。

大開通り(至JR豊岡駅)



### 裏路地探険隊員募集 平成20年10月4日(土) 「生野銀山町を歩く」朝来市生野町

\*実施日の10日前までに、18ページ掲載のT2編集部へ、住所・氏名・年齢・電話番号・「裏路地参加希望」とお書きの上、ハガキにてお申し込みください。開催は午前中、現地集合・現地解散となります。申込締切日後、案内を参加ご希望の方へご送付致します。



江戸末期創業の割烹「とど兵」さんの家の下には、玄武岩で造られたかつての「宵田のいと」が残る。店内には、とど兵の由来となった「とど」のはく裂が置かれている。



古地図をもとに説明する河間区長さん



案内役をお願いした宵田商店街振興組理事長・兼正雄さん

では、なぜ宵田が商人の住む町となったのか。その答えは、円山川の歴史に隠されている。市民会館前を流れる廃川は、昔、円山川の本流であった。車のない当時、輸送の主役は船。川沿いには、「宵田のいと」と呼ばれる船着き場が整備され、年貢米を始め但馬の大部分の物資が運ばれてきたという。また、城崎温泉に向かう湯治客も円山川の船便を利用したといいい、まさに人と物が集まるターミナル港であった。「宵田のいと」は円山川の洪水の度に補強され、大正年間には石垣の高さは3〜4メートルを誇り、時代が経つにしたがい堅固な護岸になったという。岸から約30メートル先まで敷き詰められた沈石が、難工事を物語る。古老から伝え聞いたという地元の人々の話では、家の裏から釣りができたという。川が身近にあったことを偲ばせるエピソードだ。輸送の主役が鉄道、車に変わるにつれ、その役割を終えた「宵田のいと」。現在は国道312号の下に眠っているが、宵田橋から割烹「とど兵」さんの家の下を望むと、玄武岩で構成された立派な石垣が残り、往時の様子を伝えている。

これら城下町の建設には、町衆と呼ばれる名主が民衆を率い、町づくりを行ってきた。江戸時代には名字帯刀を許される商家もあり、時には私財を投げ打って宵田の開発に尽くしてきたという。こうした町衆の心意気は、現代も脈々と受け継がれている。「カバンストリート」は、商店街と豊岡の地場産業であるカバン産業の活性化を目的として、平成17年に始まった新たな挑戦。カバン専門店「カバンステーション」を中心に、洋服屋やクリーニング屋などのショーウィンドウにカバンが飾られて、販売もしている。さらに、カバンの自動販売機があるのも面白い。

通りには、キャリア50年以上のカバン職人・植村美千男さんの工房も出店。宵田商店街の依頼を受けて、「カバンストリート」設立と同時にオープンした。全国からカバンの修理が寄せられるカリスマ職人で、店内は地元やカバンを愛する人の社交場ともなっている。時代の変遷とともに、その姿を変えた宵田の町並み。しかし、町づくりにかける町の人々の気持ちは、昔も今も変わらないことを教えてくれる。